

国際留学生 会館から

「筏師一本乗りに挑戦！」 ～日本の文化と歴史を体験～

真的太高兴了！
チェン デア タイ ガオシン ラ
本当に嬉しいです。
(中国語)

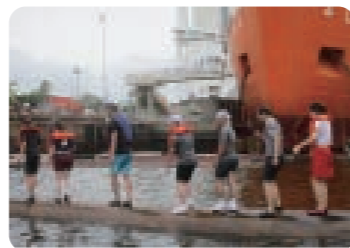
名古屋工業大学大学院工学研究科
博士前期課程社会学専攻

リュウ トウエン
劉 冬媛さん(中国出身)



技に目を奪われると同時に、こんなことが自分にできるのだろうか少し怖くなりました。初めて筏に乗った時は一瞬で海に落ちてしまい、自分でも何が起こったのかわからないほどでしたが、何度も諦めずに練習するうち、足腰の使い方やバランスのとおり方が分かり、本番では30秒近く乗ることができて大感激でした。

筏師一本乗りの歴史は大変古く、江戸時代から続いており、今なおその伝統が引き継がれています。今回の体験で日本の古き良き時代の文化に触れることができ、私にとって思い出深い一日となりました。



▲一本乗りに挑戦！(右端が劉さん)

(※)名古屋における筏師の歴史は大変古く、元和元年(1615年)尾張藩祖の徳川義直が木曾(長野県の南西部)を領有し、年貢として材木を納めさせたことから始まった。材木は、飛騨川、木曾川に流し、桑名または筏川を経由して、筏により名古屋へ運ばれた。一本のさおかぎで港内や堀川などで材木を巧みに操る筏師の技術の優劣は、材木商の興亡に大きな影響を与えたとされている。

7月15日に「海の日名古屋みなと祭」が開催されました。祭りのスタートを飾る「筏師一本乗り大会」(※)は、海面に浮かぶ不安定な丸太や角材の上を、名古屋港の「筏師」たちが軽快に曲乗りするなど高度な技を披露してくれる人気の行事であり、名古屋市無形民俗文化財にも指定されています。この大会に国際留学生会館(以下「ISC」)の留学生たちも毎年特別参加しています。今年の挑戦者のひとり、劉冬媛さんにお話を伺いました。

私は2016年に来日し、昨年4月よりISCで生活しています。ISCでは日本文化に触れる機会が数多くあります。昨年「筏師一本乗り大会」の参加者募集を見て、とても珍しい企画だったので大変興味を持ちました。しかし当時は大学院の入試を控えていたため、参加を断念しました。今年も同じ募集を目にして、今まで体験したことがない日本の伝統文化を堪能したいという強い思いから参加を希望しました。



▲筏師一本乗り大会に挑戦した留学生たち(右端が劉さん)

当日は私を含めて5名の留学生が参加しました。会場に到着したときには、すでに専門の職人の方々が練習していました。大きさが異なる木材の上を難なく乗りこなす熟練の

国際留学生会館とは...

NICが2001年から管理・運営している、名古屋市港区にある留学生専用の宿泊施設。居室90室のほか、研修室や和室、体育室などを備え、100名の留学生が生活できる。日本文化理解講座の開催や各種相談・情報提供、地域住民との交流などを行っている。

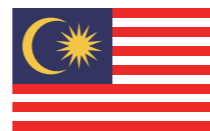
ともくろ このまちで、 共に暮らす 外国人たち



この地域で暮らす外国人にスポットを当てて、ご紹介するコーナーです。

日本のことばには 日本の文化が入っている

スー イエンサンさん(マレーシア出身)



日本語を習得するため昨年10月に来日し、名古屋の日本語学校で勉強に励んでいます。今回が5回目の来日となります。17歳の高校生の時に国際交流会に参加するため、初めて日本に来ました。その時のホームステイ先のお母さんが着付けの先生で、着物を着せてもらったのがきっかけとなって日本文化に興味を持ちました。その後も観光で3回来日し、その度に人々の勤労態度や工業製品のすばらしさに衝撃を受けました。

日本の留学生活を支えるため、和風レストランでアルバイトを始めましたが、畳敷きの部屋での給仕で膝の曲げ伸ばしが大変でした。またお客さんとの会話で、日本語が不自由なのに加えて敬語が使えないことでのストレスが重なり、苦労しました。来日当初で友人もいなかったため、心の支えになったのは、通話アプリを通してマレーシアにいるフィアンセと話をすることでした。今は友人の紹介で、ある日本語学校で先生をサポートするパートタイムのアルバイトをしています。日本語は

想像以上に難しいと感じています。敬語もそうですが、言葉に日本の文化や情緒が入っていて表現が独特というのがその理由です。

日本では、小学校から給食の準備や掃除を皆でやり、自分の役割を自覚して仕事を完成する、社会の一員としての責任を持つという教育を受けているので、社会に出てでも効率的な仕事ができるのだと思います。これは本当に素晴らしいことで、日本のサービスは世界一だと思っています。

これからの目標は、日本語検定の1級を取得して、英中日の通訳の仕事に就くことです。そして将来的にはUN(国際連合)の同時通訳を目指しています。



▲自習風景

途上国の現場で活躍する、地域の国際協力NPO/NGOリーダーにお話を伺います。



～国際協力・ハイチ編～

テーマ：農業・教育

ハイチの人々と共に生きる

ハイチの会 代表 中野 瑛子 さん



▲学校給食

リーダーズ・メッセージ
現場で現地の人々と衣食住を共にし、土に触れ、共に学ぶことが大事。



▲中央が中野さん

ハイチの会の設立は1986年、中野さんの幼稚園時代の恩師である本郷幸子シスターがカリブ海のハイチ共和国で始めた識字教室を支援することがきっかけでした。

1804年にフランスから独立して以来、ハイチでは不安定な社会状態が今なお続き、支援活動を行う村には水道・電気・燃料などの、インフラが整っていません。それがさらなる貧困を招き、今も支援を必要としています。

ハイチの人々が自立するためにはまず「教育」と「農業」の支援が必要と、中野さんを始め支援活動をする役員の方々は日々熱く語ります。

同会は貧しさのため学校に行けない子どもたちに識字教育を行い、教育施設を作り、衛生教育、地域の人々の生活指導を行っています。また、1日1食も食べられない子どもたちのため、給食支援に力を入れて10年計画で支援をしています。



▲農園のバナナ畑

また、食糧不足を補うため、農園を建設しバナナやマンゴー、キャッサバなどの増産にも取り組んでいます。2001年にはハイチの青年を日本に招致して、農業研修を行い、帰国した青年は地元住民と共にヤギを飼育する農園を始めました。現在は7haの農園になりましたが、毎年襲う自然災害、日照りやハリケーンにより農園経営は厳しく、自給自足が出来るまでには至っていません。しかし、バナナは支援している学校の給食として他の作物と共に提供できるようになりました。

井戸掘り技術の指導や通学路工事などインフラの整備も進めています。

活動する中で困難に直面することは多々あります。昼間は気温が高く農作業はできず、物を運ぶにも道路まではロバに乗せて運んだり、橋の無い川を裸足で渡らなければならない、思うように活動は進みません。しかし、そんな環境のなかでも「ハイチの人々と共に生き、農業で今日のいのちを守り、教育で明日のハイチを育てたい」と考えています。

今後の課題は現地の後継者を育成すること、夢はハイチの人々の力で自立した生活が出来ることです。

ハイチの会 Web <http://haitinokai.com/>

姉妹友好 都市の 広場

名古屋市とロサンゼルス市は1959年4月に姉妹都市提携を結び、今年度60周年を迎えました。今回は、名古屋とロサンゼルス市の交流事業についてご紹介します。



名古屋の象徴「シャチ」と、ロサンゼルス市の象徴である「グリスリーベア」をイメージした姉妹都市提携60周年記念のロゴマークです。

エキスポアナゴヤ2019

名古屋市は今年3月に、ロサンゼルスにて名古屋市の観光魅力をアピールし、認知度向上を目指すイベント「エキスポアナゴヤ2019」を開催しました。名古屋の観光、ものづくり、食などのPR展示、伝統産業(有松絞、名古屋提灯など)の展示、抹茶の実演・提供、なごやめし(名古屋コーチン・えびせんべい・ういろ)の試食、サムライパフォーマンスを行い、ロサンゼルス市民、旅行業界・マスコミ関係者など約200名が来場しました。来場者は訪日旅行に関心がある方、一度は日本を訪れたことがある方が多く、東京・京都等の次の目的地としての名古屋の可能性を実感してもらいました。両市が姉妹都市であることを知らない方も多く、名古屋市について理解を深めてもらう良い機会となりました。



▲エキスポアナゴヤ 2019

ロサンゼルス交歓高校生派遣・受入事業

姉妹都市についての理解を深めるとともに、ホームステイなどを通じて相互理解と友好親善を促進することを目的として、姉妹都市提携の翌年の1960年(昭和35年)よりほぼ毎年夏に派遣と受入を交互に実施しています。名古屋からロサンゼルスへ派遣された高校生は、翌年度にロサンゼルスから名古屋へ派遣される高校生をホームステイにより受け入れます。今年度は、7月にロサンゼルスより4名の高校生が来名し、体験入学やホームステイ、市役所訪問、歓迎交流会などに参加し、クラスメイトやホストファミリー、市民と交流を深めました。



▲交歓高校生歓迎交流会

名古屋姉妹友好都市協会の公式ウェブサイト・フェイスブックでは、姉妹友好都市にちなんだイベント情報などを発信しています。

ぜひご覧ください。

Web <http://nsca.gr.jp/>

Facebook [nagoya.sistercities](https://www.facebook.com/nagoya.sistercities) 検索